木曽三川　歴史・文化の調査研究資料

KISSO

2010 冬

Vol.73

平成 22 年

地域の歴史

伊勢湾を干拓して生まれた水郷のまち・弥富市

地域の治水・利水施設

筏川の用排水利用と木曽川用水

歴史の記録

・その時、なにが起きたか　伊勢湾台風の爪痕

・大きく変わった木曽三川河口部の生活環境

・MAP 災害を思い出す道しるべ

伊勢湾を干拓して生まれた水郷のまち・弥富市

木曽川下流左岸に位置する弥富市は、江戸時代に伊勢湾を干拓して生まれた海抜ゼロメートル地帯です。明治以降は、新東海道が通るようになり、街道沿いに商業地が発達。現在は、都市部から農村部、海岸部を持つ豊かな地域として発展しています。

弥生・鎌倉時代の海岸線

市江島から始まった弥富の歴史

愛知県の西端に位置する弥富市は、平成一八年(二〇〇六)四月に海部郡弥富町が同郡十四山村を編入合併して誕生しました。市域のほとんどが周囲を海岸堤防・河川堤防で囲まれた海抜ゼロメートル地帯です。

原始から古代までの弥富市域は、ほとんどが伊勢湾の海中であったため遺跡などは存在しません。市域が最初に歴史に登場するのは平安末期で、津島市と弥富市(五之三・荷之上・鯏浦地区)にまたがる市江島が開発されはじめていました。市江島は室町時代に開発が進みましたが、当時は尾張・伊勢の国境は明確でなく、市江島は入植者が伊勢長島から入った者が多かったことから伊勢国を称していたようです。

織田信長と一向一揆

戦国時代に市江島一帯を支配していたのは、鯏浦に拠点を置いた豪族・服部一族(服部党)でした。服部党は、長島一向一揆の一翼を担っていましたが、天正二年(一五七四)織田信長の侵攻によって一揆勢は潰滅しました。その殲滅戦は苛烈をきわめ「市江島以南、猫一匹とて生けるものなし」と言われるほどで、市江島は無人の荒野となりました。

荒廃した市江島に、宇佐美・服部・佐藤・伊藤四家が入植し農民を集めて復興にあたりました。この四家は、信長の侵攻以前に市江島が津島祭に出していた車楽舟を再興したことから「車屋」と呼ばれました。このうちの一人、服部正友が建てた屋敷が、国の重要文化財に指定されている荷之上の服部邸です。

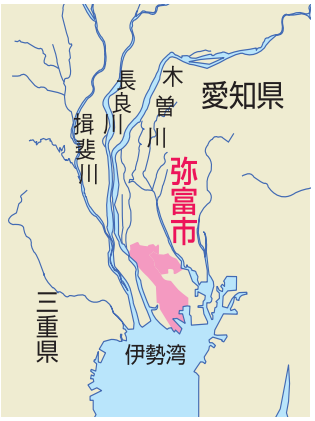
重要文化財　服部邸

尾張藩の新田開発

戦乱が収まり幕藩体制が確立すると、諸藩はこぞって新田開発に取り組みました。尾張藩の新田開発の中心は伊勢湾の干拓地で、弥富市域のほとんどが、江戸時代以降に干拓によって造成された土地です。

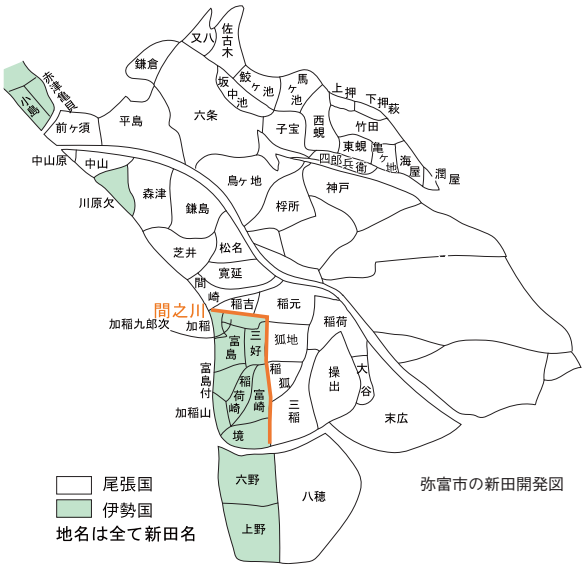
二代藩主光友の時代になると、藩の普請奉行や勘定奉行・野方奉行などが新田の造成を行うようになりました。新田開発を希望する富商・豪農が奉行所に目論見書を付けて申請し認められると、申請者から敷金をとった奉行所が堤防・杁・橋などを造ります。完成後は出資者を年貢免除の年限(鍬下年季)を設けて地主としたり、新田の一部を除地(年貢免除地)として与えたりしました。

しかし、一七世紀末になると、藩財政が悪化したため、新田開発は町人に任せる方式に変更されました。新田開発の希望者は、敷金を藩に納めて開発の権利を取得し、自ら開発工



事を行うことで長期（一〇年～一五年）の鍬下年季を得るようになりました。

干拓水田の開発は、出資者に莫大な利益をもたらす反面、非常にリスクの高い事業でした。海岸堤防は、台風高潮によって度々破堤し、新田は海水に浸かりました。中には復旧の目処がたたず、新しい出資者による再開発が行われるまで亡所となる新田もありました。



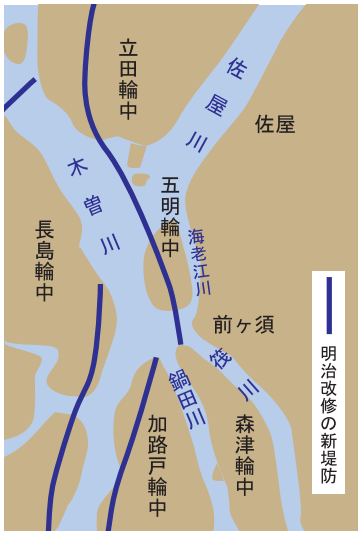
間之川と境杭

江戸時代当初、弥富市域の主だった土地は市江島の一部および木曽川と海老江川に囲まれた五明輪中で、これらは伊勢国長島藩領となっていました。その後、市江島が尾張領になり、尾張・伊勢の国境は市江島と五明輪中の間を流れる海老江川となりました。五明輪中は、幕府直轄地として笠松代官所支配下となり、明治一三年（一八八〇）愛知県に編入されるまでは伊勢国でした。

尾張側から森津・芝井・寛延・稲元と新田がつくられ、伊勢側から鍋田川を超えて加稲・加稲九郎次新田が開発されると尾張藩と長島藩の間で国境をめぐる争いがおこり、両藩は、加稲と狐地間を流れる川を間之川として国境に取り決めました。貞享四年（一六八七）両藩役人が立会い、川中に「御境杭」が立てられ、何人も触れることを禁じられました。杭は、加稲新田と間崎新田、加稲・加稲九郎次・三好新田と稲元・狐地新田の間に打たれ、その後、開発が進むと富崎新田と稲狐新田間に、さらに境新田と三稲新田間に打ち増しされて行きました。

現在の弥富市で江戸時代に伊勢国に属していた地域は、廃藩置県で三重県に属する事になりますが、明治一三年（一八八〇）、鍋田川が愛知・三重県境と定められ愛知県に編入されました。

明治二〇年（一八八七）から始まった明治改修では、筏川が締め切られ、五明輪中が木曽川堤防の堤内地になるなど、木曽川筋の地形は大きく変貌して行きました。



明治改修以前の五明輪中付近

現在の間之川付近

新東海道と前ヶ須湊

江戸時代、東海道の熱田宿から桑名宿に至るルートは、直接舟で渡る「七里の渡」か、佐屋湊から渡る「三里の渡」のいずれかで、ルートからはずれた弥富市域には商業の中心地はありませんでした。しかし、江戸時代後期になると、佐屋川が河床上昇により通船に支障をきたすようになり、佐屋宿の渡船機能は低下して行きました。明治五年（一八七二）には、前ヶ須街道（新東海道）が完成して、佐屋街道に替わり公道としての地位を得ました。街道の西端に設けられた前ヶ須湊から木曽三川を渡る渡船は「ふたつやの渡」と呼ばれました。交通の要所となった前ヶ須は海西郡の中心地として郡役所・警察署などの官公庁が集まり商業地として発展しました。

「ふたつやの渡」の碑

新東海道は、大正八年（一九一九）国道一号線となり、昭和八年に木曽川を渡る尾張大橋が、翌九年に揖斐・長良川の伊勢大橋が完成し、「ふたつやの渡」はその役割を終えました。尾張大橋の建設とともに、名古屋～前ヶ須間の一号線は、直線的な現在のルートに造りかえられました。

戦後は、市内を通過する国道二三号・東名阪自動車の供用によって、さらに交通の利便性の高い地域となり、幹線道路沿い・鉄道駅周辺を中心に商業地・宅地開発が進み、都市部から農村部、海岸部を持つ豊かな地域として発展しています。

尾張大橋

■参考文献
『弥富町史　通史編』平成六年　弥富町
『弥富町史　村絵図編』平成二年　弥富町
『十四山村史』平成一一年　十四山村
『海部・津島の歴史とくらし』昭和五九年
愛知社会科教育海部津島支部研究会

地域の治水・利水施設

筏川の用排水利用と木曽川用水

江戸時代に木曽材の流送に使われていた筏川は、締め切り後も用排水路として重要な役割を果たしてきました。不安定だった干拓地の用水確保は、木曽川用水の完成によって解消され、豊かな農業地帯に発展しました。

六門樋門

明治改修以前の用・排水状況

干拓された新田では、農業用水の確保とともに排水路が重要な役割を果たしてきました。明治改修以前の当地域には佐屋川と木曽川の分派川である筏川・鍋田川が流れていました。筏川は、木曽川を流送されてきた木材を熱田白鳥の貯木場まで運ぶルートとして重要な河川で、河口付近には木材を一時留め置いて、風待ちをする筏場が設けられました。

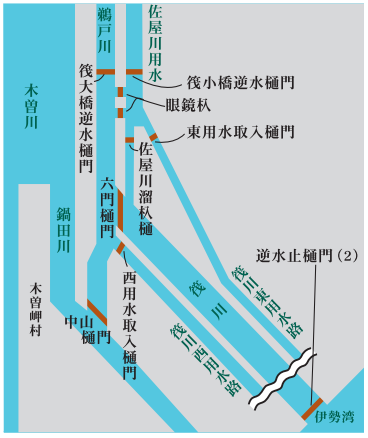
内陸部の灌漑用水は、これら河川から取水していましたが、南部の海岸部では、満潮時に筏川・鍋田川のうわ水の逆潮取水（比重の重い潮水の表層に浮いた川の水を取水する）によって用水を確保していました。

排水は、海岸部では干潮時に樋門を開いて行う排水が比較的容易でしたが、筏川・鍋田川に排水していた内陸部では干拓の進展に伴って排水状況が悪化して行きました。明治一四年（一八八一）には、鍋田地区で排水目的の改修工事が行われていますが、明治二四年（一八九一）の濃尾地震よって大規模な地盤沈下がおこり、地域の排水状況はさらに悪化して行きました。

佐屋川・筏川の廃川

木曽三川下流域の抜本的な治水対策として行われた明治改修によって、明治二四年（一八九一）筏川分派点が締め切られました。このため河口には逆水止樋門が造られました。これにより筏川は木曽川から完全に分離され、木曽材流送の機能もなくなり、筏場は今の尾張大橋東詰に移転しました。また、これまで筏川から取水していた両岸地域の用水を確保するため、筏川の両岸に筏川東西用水路が建設されました。

佐屋川も明治三二年（一八九九）分派点が締め切られ、翌年には下流合流点の締め切りが完成し廃川となりました。これまで佐屋川から取水していた地域のために佐屋川用水が建設され、その排出先は筏川となりました。弥富市域では、五之三地区が佐屋川用水に依存することとなりました。



筏川周辺用排水樋門概要図

また、これまで佐屋川に排水していた立田輪中が排水先を失ったため、立田輪中の中央を流れる鵜戸川を南に延長して鍋田川に排水することになり、明治三五年（一九〇二）立田悪水路（鵜戸川延長）と中山樋門などの施設を完成させました。しかし、この排水計画は、木曽川の水位が上昇していたことから失敗であったことが判明しました。立田輪中は、鍋田川への排水をあきらめ筏川に排水先を変更し、筏川落とし樋門（六門樋門）を造り、さらに排水を円滑にするため筏川河口の逆水止樋門を増設しました。

こうした経緯で、一度は締め切られた筏川が、海部郡西部の排水を一手に引き受けることになりました。筏川最上流部に位置する六門樋門周辺には多くの樋門が造られ、複雑な用排水を制御していました。中心となる六門樋門は、当初三門だったものが、立田輪中の排水悪化に伴って明治四五年（一九一二）・昭和三年（一九二八）に増設され

筏川の現況（新筏川橋より下流）

て六門となりました。

弥富市域の排水は、日光川水系宝川、鍋田川および筏川、海岸部では直接伊勢湾に排出していましたが、地盤沈下などによって自然流下による排水が困難となる地域が多くなり、明治時代の後半には排水機が設置され機械排水への転換が行われました。

筏川水利事業

昭和一九年（一九四四）から二〇年にかけて地震による地盤沈下が著しく、筏川東西用水路は大きな被害を受けました。また、水源としていた鍋田川の塩分濃度があがり、営農に影響する危険性がでてきました。

その対策として、取水口を木曽川五明地点に移す筏川土地改良事業が計画されました。事業は、長年の懸案であった筏川用排水問題の解決と、五明地区および鍋田干拓地の用水確保を目的として、五明取入樋門の建設、用水路の改修、鍋田干拓地までの用水路延長などを行い、昭和二九年（一九五四）に開始、昭和三八年（一九六三）に完了しました。

しかし、五明樋門からの取水でも塩害の不安は解消されず、昭和四二年（一九六七）の全国的な干ばつでは、木曽川河川流量が減少したため五明取水口で塩分濃度が上昇、取水できない事態がおこりました。

木曽川用水事業計画

筏川東岸用水路

この地域の不安定な用水事情は、昭和五二年（一九七七）の木曽川用水完成でようやく解消されました。

木曽川用水計画のきっかけは、既存の宮田・木津（こつつ）・羽島・佐屋川の四用水を統合して濃尾平野全域の農業用水安定確保を図る計画の実現要求が高まったことによります。この計画は濃尾用水事業として、最下流の佐屋川用水を除く三用水が統合、昭和三三年（一九五八）着工の運びとなりました。この濃尾用水事業に参加しなかった佐屋川用水より下流の地域では濃尾用水第二（木曽川用水）事業を計画しました。

事業は、昭和四四年（一九六九）に施工決定が下り、昭和五一年（一九七六）に暫定通水、翌年全面的に取水が可能となりました。木曽川用水の完成によって、これまで弥富市域の用水の中心的な役割を果たしてきた筏川東西用水はその役割を終えました。

木曽川用水・長良導水施設概要図

木曽川用水の機能

木曽川用水は、農業用水として愛知県愛西市・弥富市・稲沢市・飛島村、三重県桑名市の約七八八〇haに毎秒最大二五・六三m^3を、工業用水として、愛知県に毎秒最大六・三m^3、三重県に毎秒最大七・〇m^3を、水道用水は、愛知県に毎秒最大一・六m^3、三重県に毎秒最大一・〇m^3を供給しています。

稲沢市祖父江町馬飼に建設された木曽川大堰から南に伸びる海部幹線水路は、延長一七・五kmのほとんどが旧佐屋川用水敷を利用しており、弥富市を流れる筏川東岸用水路・筏川西岸用水路は、旧筏川東西用水路敷を利用しています。三重県への送水は、弥富揚水機場で揚水され木曽川水管橋を通って送られます。

木曽川用水のほか、弥富市を通る利水施設として、長良川河口堰の水を知多浄水場に運ぶ長良導水事業の弥富ポンプ場（長良川から取水した水を筏川取水場まで送るポンプ場）と筏川取水場（知多浄水場へ送るポンプ場）があります。

弥富揚水機場

生まれかわった弥富市の農業

長い年月をかけて干拓によって造られてきた弥富市の農業は、用水の確保・円滑な排水に腐心してきました。しかし、木曽川用水の完成と、排水路・排水機場の整備によって、かつて泥田と呼ばれた湿田は乾田となり、耕地の集団化も進んで大型農業機械の導入が可能となりました。末端までパイプライン化され年間をとおして二四時間供給される用水は、水稲以外にも路地野菜・花き・畜産などを計画的に生産する新しい農業への飛躍をもたらしました。

■参考文献
『弥富町史　通史編』平成六年　弥富町
『木曽川用水通水二〇周年記念誌』平成九年
木曽川用水通水二〇周年記念事業実行委員会

歴史の記録

その時、なにが起きたか
伊勢湾台風の爪痕

伊勢湾台風から五十年

昭和三四（一九五九）年九月二六日二一時三五分、伊勢湾台風が名古屋港に最も接近した時刻です。戦後最大の自然災害と呼ばれた伊勢湾台風災害から五〇年の節目の年にあたった平成二一（二〇〇九）年は、この体験を「次世代に語り継ごう」と防災訓練・写真展・講演会・追悼式など多くの行事が各地で開催されました。

激甚な高潮災害

伊勢湾台風の特徴は、類を見ない気圧の低さと強風、これに伴う異常な高潮の発生でした。このため被害は、愛知・三重両県の伊勢湾海岸部が最も激甚で「高潮災害」とも云われ、愛知・三重・岐阜の三県の死者行方不明者は、四、七五五名にのぼり全国の死者行方不明者の九三％に達しました。この伊勢湾台風とはどんな台風であったのでしょうか、改めて思い起こしてみましょう。

東海三県の家屋被害状況

	全壊戸数	半壊戸数	流失戸数
岐阜県	3,853	12,233	118
愛知県	21,381	62,995	2,135
三重県	4,089	12,129	1,191
全国	35,125	105,347	4,486

行政区別死者行方不明者数

	行政区人口	死者行方不明者	死者行方不明者千人率
木曽岬村	2,993	328	109.6
長島町	8,708	383	44.0
飛島村	4,290	132	30.8
川越村	7,718	174	22.5
弥富町	16,037	322	20.1
名古屋市南区	146,500	1,417	9.7
名古屋市港区	91,591	375	4.1

▲ 伊勢湾台風による家屋の全半壊戸数は、愛知・三重・岐阜の三県で116,680戸と全国総計の83％に達しました。そのなかでも高潮の直撃を受けた木曽三川河口部の桑名郡木曽岬村（現木曽岬町）では全人口の11％の人がなくなり、桑名郡長島町（現桑名市長島町）では35％の人が犠牲となった集落がありました。

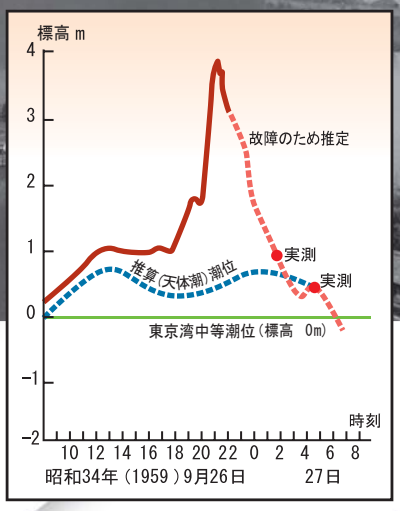
伊勢湾台風進路データ

年月日時	緯度（北緯）	経度（東経）	中心気圧 hPa
09.25.15:00	24.8	135.8	905
09.25.21:00	26.5	134.8	910
09.26.03:00	28.0	134.5	910
09.26.09:00	29.7	134.5	920
09.26.15:00	32.0	134.9	920
09.26.21:00	35.0	136.1	940
09.27.03:00	38.9	138.9	965
09.27.09:00	40.5	140.3	985

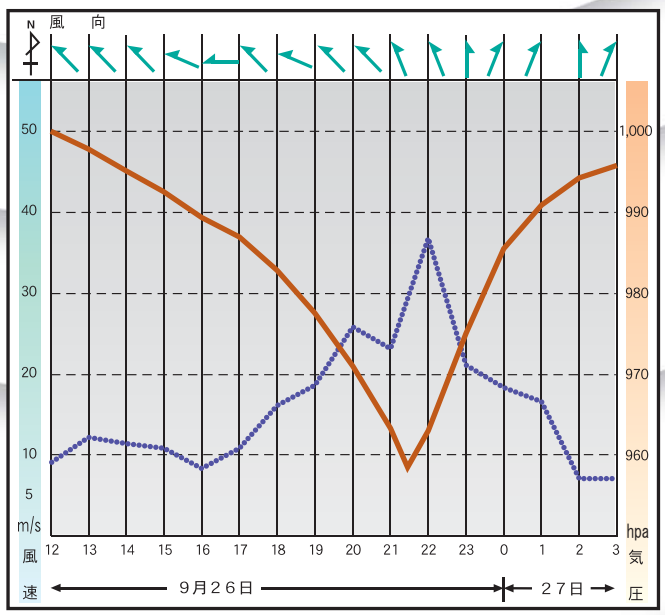
主要な三大台風諸元

台風名称	上陸年月日	上陸時気圧（hpa）	潮位偏差（m）
室戸台風	1934.09.21	911.6	2.9
枕崎台風	1945.09.17	916.3	2以上
伊勢湾台風	1959.09.26	929	3.55

名古屋港の験潮記録

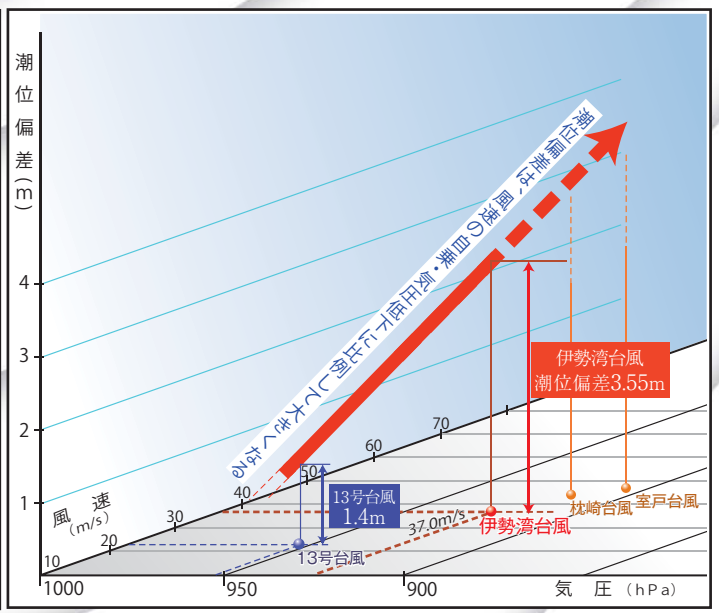


気圧と風速の変化



名古屋測候所記録

気圧・風速と潮位偏差の関係



台風の進路と高潮の発生

台風にともなう高潮の大きさは、台風の進路・気圧・風速によって決まります。台風に吹き込む風は反時計回りですから、伊勢湾では台風が湾の西側を北上した場合に南風が吹き続け高潮が起こります。台風史上では伊勢湾台風の進路が最も大きな高潮を発生させる進路でしたが、高潮の大きさは、風による「吹き寄せ効果」と気圧による「吸い上げ効果」によって生じる潮位偏差で表されます。吹き寄せによる海面上昇は風速の自乗に比例し、吸い上げによる海面上昇は気圧が一hPa低くなると約一cm上昇すると云われています。名古屋港で最高潮位（標高）三・八九mを記録した時の天体潮は〇・三四mでしたが、暴風による吹き寄せと低気圧による吸い上げによって三・五五mの潮位偏差が発生し、未曾有の高潮となりました。

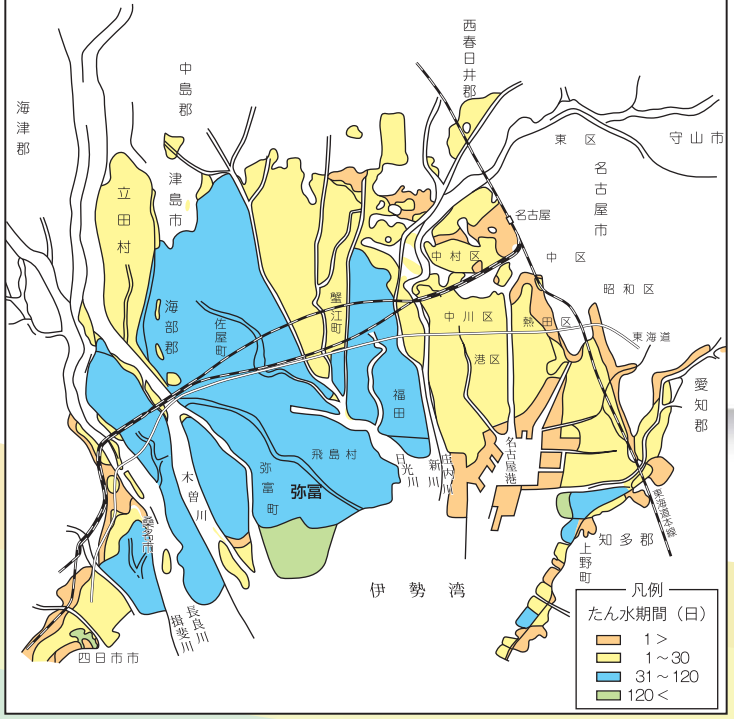
大きな高潮の可能性

この時の名古屋測候所での気圧は九六〇hPa、風速は三〇m/sでした。我が国には、伊勢湾台風を上回る室戸台風や枕崎台風の経験があります。もし、これらが伊勢湾台風の進路を通過したとすると、伊勢湾台風を上回るに大きな高潮が発生することとなります。また、最近の研究によると、上陸地点が伊勢湾台風よりやや西側で北側寄りの進路をとった場合が、伊勢湾において最も大きな高潮が発生することがわかってきました。

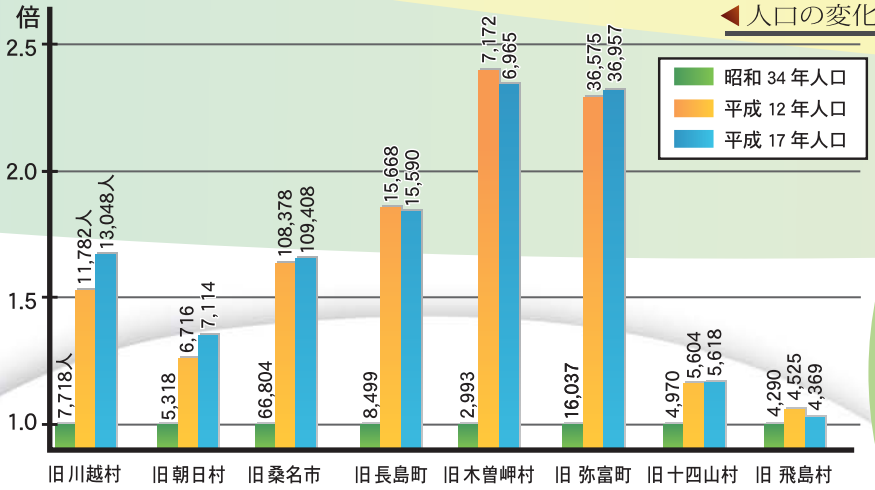
大きく変わった木曽三川河口部の生活環境

ゼロメートル地帯が生む長期湛水

伊勢湾での高潮が次第に大きくなるにつれて、各地で海岸堤防を越えた高潮が住宅地や耕地に浸水を始め、やがて各地で破堤し海水が奔流となって陸地に侵入し多くの人命を奪い、家屋や財産を押し流しました。伊勢湾周辺の海岸堤防や河川堤防の破堤箇所は二二〇ヶ所、破堤口から侵入した高潮は激流となって、海岸より一五kmも離れた津島市まで達し、その浸水面積は約三〇〇㎢に及び、長島町南部では百日におよぶ長期湛水を余儀なくされました。



◀被害状況平面図



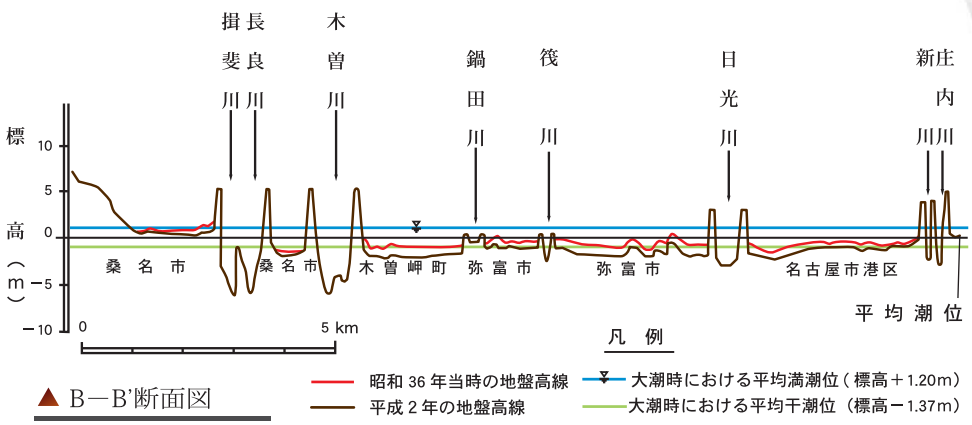
◀人口の変化

二倍を超える人口の増加

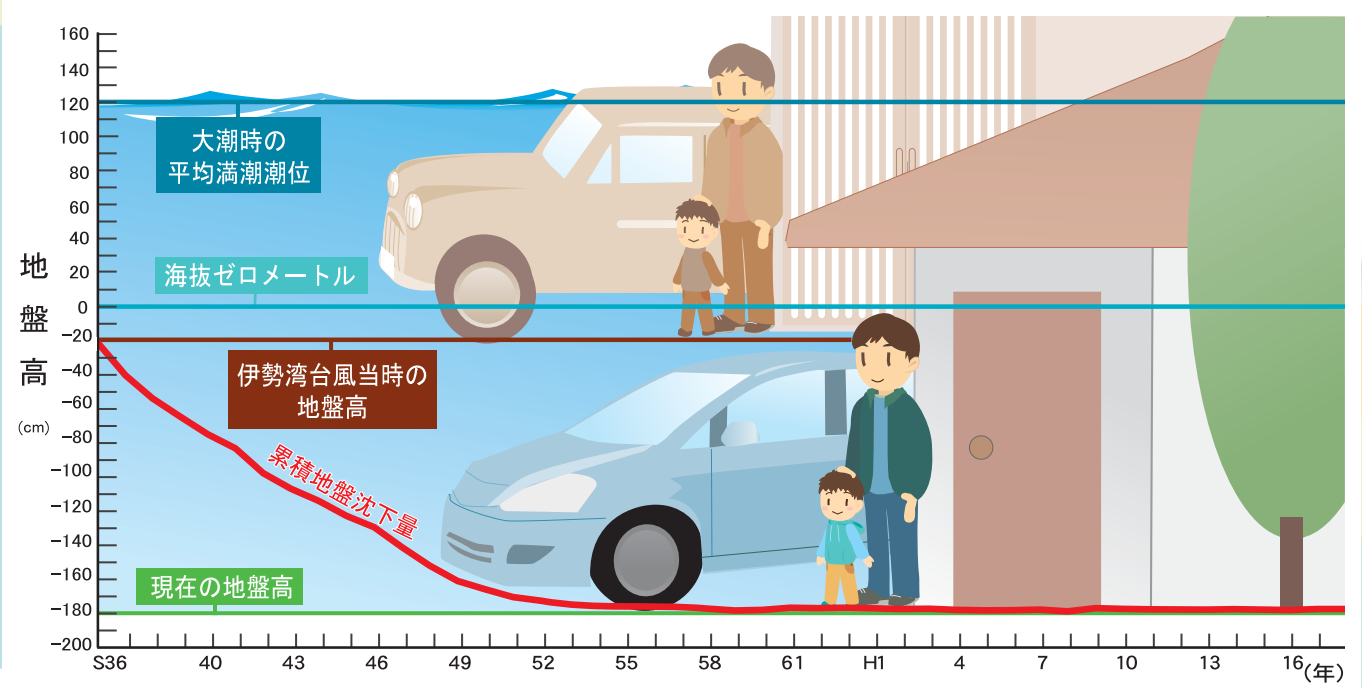
あれから五〇年、私たちの生活環境は大きく変化し、再び伊勢湾台風と同じような状態が再現されると、さらに大きな被害が発生するようになってきました。それは人口の増加と大規模な地盤の沈下によって説明されます。昭和三八年に長島町南部で温泉が開発され大遊園地が出現するとともに、名古屋を中心とする住宅地開発が木曽三川河口部にまで拡がり、全町村域が水没した長島町や木曽岬村の人口は、被災時に比べて一・八～二・三倍に増加しています。これらの地域では、伊勢湾台風を体験していない人が住民の五〇％以上を占め、効果的な避難態勢が講じられない場合は伊勢湾台風を上回る犠牲者が出ることが想定されます。

一・六mもの地盤沈下

一方、木曽三川河口部の地盤の低いことは高潮による浸水によって改めて認識されましたが、その後の広域的な地盤沈下により長島町南部では一・六mも地盤が下がりました。このことは、伊勢湾台風で床下浸水程度であった家屋では一階部分が水没することになり被害区域と被害程度の拡大につながります。



▲B－B'断面図

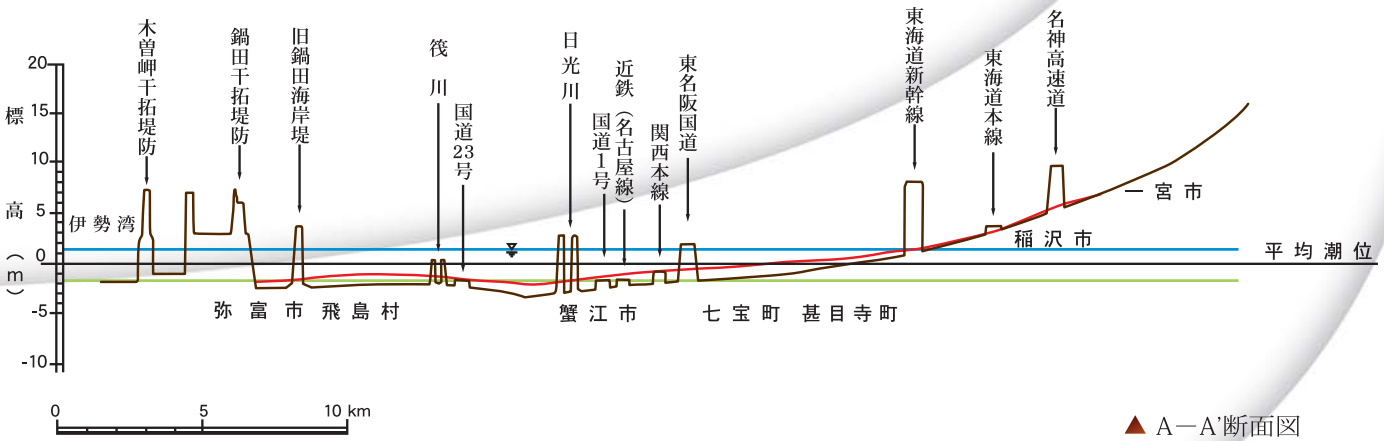


▲ 地盤沈下の状況

一・五倍に広がったゼロメートル地帯

木曽三川河口部を中心とするゼロメートル地帯（地盤標高が海抜〇m以下の地域）の面積は、伊勢湾台風当時では約一八六㎢でしたが、現在では約二七四㎢に拡大しています。地盤高が海面が最も高くなる大潮時の平均満潮位（標高一・二m）以下の区域では、自然排水が困難となりますが、このような大潮時の平均満潮位の面積は約四〇〇㎢に及びその上流端は稲沢市から養老町を結ぶ線にまで達しています。

◀ ゼロメートル地帯



▲ A—A'断面図

慰霊碑・記念碑

1 伊勢湾台風殉難之塔
弥富市西末広

2 伊勢湾台風災害復旧竣功記念碑
弥富市中山町松山

3 伊勢湾台風水難の碑
弥富市鎌島　弥富中

4 伊勢湾台風災害復興之碑
弥富市六條町中切

5 伊勢湾台風水難児童慰霊の像
弥富市芝井　大藤小

6 狐地土地改良之碑
弥富市狐池

7 伊勢湾台風殉難慰霊之碑
弥富市狐地　栄南小

8 鍋田神明社
弥富市鍋田町

9 伊勢湾台風殉難之碑
弥富市鍋田町

10 伊勢湾台風殉難慰霊観音
弥富市鍋田町

11 伊勢湾台風殉難之碑
海部郡飛島村大字新政成

12 治水昭和の宮
海津市海津町油島

13 木曽岬神社
桑名郡木曽岬町雁ヶ地

14 伊勢湾台風締切記念碑
桑名郡木曽岬町源緑輪中

15 伊勢湾台風藤里殉難者供養塔
桑名郡木曽岬町源緑輪中上藤里

16 伊勢湾台風遭難者碑
桑名郡木曽岬町源緑輪中

17 伊勢湾台風殉難の碑
桑名市長島町松蔭

18 伊勢湾台風水難犠牲者慰霊碑
桑名市長島町浦安

19 伊勢湾台風締切記念碑
桑名市長島町白鶏

20 伊勢湾台風記念観音
桑名市長島町松蔭

21 平和観音像
桑名市長島町松蔭　中部小

22 水難犠牲者之碑
桑名市長島町松ヶ島

23 伊勢湾台風殉難の碑
桑名市福岡町

24 伊勢湾台風不忘碑
桑名市立田町

25 伊勢湾台風30年碑
桑名市吉の丸

26 高潮堤防緊急嵩上事業竣工之碑
桑名市吉の丸

27 城南干拓開拓史の碑
桑名市福岡町

28 伊勢湾台風殉難之塔
三重郡川越町亀崎新田

29 伊勢湾台風高潮殉難者之墓
三重郡川越町亀崎新田

伊勢湾台風浸水位表示

1 飛島村役場
海部郡飛島村竹之郷

2 弥冨市役所
弥富市前ケ須町南本田

3 弥冨市鍋田支所
弥富市稲吉

4 木曽岬町役場
桑名郡木曽岬町大字西対海地

5 木曽岬小学校
桑名郡木曽岬町田代

6 木曽岬中学校
桑名郡木曽岬町大字中和泉

7 雁ヶ地地内
桑名郡木曽岬町大字雁ヶ地

8 長島ユニータウン
桑名市長島町松ヶ島

9 伊曽島地区市民センター
桑名市長島町白鶏

10 長島町教育集会所
桑名市長島町十日外面

11 飛島中学校
海部郡飛島村大字飛島新田字竹之郷

高潮堤防が整備された今日では破堤ヶ所を確認することはできませんが、木曽川左岸(木曽岬町)と揖斐川左岸(桑名市長島町)で最終締切の位置が記念碑の存在によって知ることができます。

慰霊碑・記念碑
浸水位表示標識
破　堤　ヶ　所

MAP
災害を思い出す道しるべ

伊勢湾台風から五〇年、木曽三川河口部の海岸堤防・河川堤防は二六ヶ所で破堤し、ここから激流となって流れ込んだ高潮によって多くの人々が犠牲となりました。地盤沈下によってその機能が損なわれた高潮堤防も、現在では補強工事が進み穏やかな河口部の風景が見られ、そこには伊勢湾台風の惨事の片鱗をも見ることができません。

しかし、高潮堤防周辺や地域を丹念に見てゆくと、処々に当時の状況を思い出させる施設や記念碑・慰霊碑を見ることができます。そこに刻まれている一字一句が再び惨事を繰り返さないよう後世へ呼びかけているようです。

各地に建立されている慰霊碑には、被災状況や犠牲者の名が刻まれていて、その地区の当時の惨状を偲ぶことができます。また、主要な地点には、伊勢湾台風の被災水位を表示した標識が立てられていて、そこに立ってみると湛水深が如何に大きかったことに改めて驚かされます。

弥富
愛西市
長島
桑名市
桑名
桑名城跡
益生
朝日町
朝日
富田
川越町
東名阪自動車道
伊勢湾岸自動車道
JR関西本線
揖斐川
長良川
員弁川
258
1
421
23

歴史の記録

小島が気に入ったお地蔵さま

小島村（現在の小島町）

今の尾張大橋のたもとににあった小島村は、川をはさんで長島と向かいあっていました。

ある暑い夏の夕方、村の若者が二人、舟で木曽川を渡って長島まであそびに出かけました。その帰り道、二人は、道端のお地蔵さまを見つけると、

「小島には一つもお地蔵さまがない。このお地蔵さまを川むこうまでもって帰ろう」ということになって、ムシロに巻いて舟に乗せて運び、堤の上にお地蔵さまを寝かせて帰りました。翌朝、お地蔵さまをみつけた村の人々は、たいそう有難がって、お堂を建ててお祀りしました。

一方、長島の方では、無くなったお地蔵さまを探して大騒ぎ。このお地蔵さまは昔々、織田信長が長島に攻め込んだ時、逃げてきた子供たちを、念力で助けてくれたと伝えられる大切なお地蔵さまでした。しばらく探して川向こうの小島にお地蔵さまが祀られているのを聞きつけた長島の人々は、事情を話して、お地蔵さまを送り返してもらいました。

ところが、長島の人たちの夢枕に、お地蔵さまが現れて「わたしは小島が気にいった。もう一度帰りたい。」としきりに頼まれたので、それほど申されるならばと、小島の筏川堤に祀られ、盆、正月には長島からお供物が届けられるようになりました。

木曽川文庫利用案内

ヨハニス・デ・レイケに関する文献など約4,000点の図書などを収蔵、木曽三川の歴史を知るために、多くの方々のご利用をお待ちしています。

船頭平閘門
木曽川文庫

《開館時間》
午前8時30分～午後4時30分

《休 館 日》
毎週月・火曜日（月・火曜日が祝祭日の時は翌日）・年末年始
*夏休みの火曜日などには開館日もあります。

《入 館 料》無料

《交通機関》
国道1号尾張大橋西詰から車で約10分
名神羽島I.Cから車で約30分
東名阪長島I.Cから車で約10分

木曽川文庫ホームページ
http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/bunko/index.html

木曽川文庫へのお問い合わせは
〒496-0946 愛知県愛西市立田町福原
TEL.0567-24-6233 FAX.0567-24-5166
Mail kisogawabunk@mist.ocn.ne.jp

編集後記

伊勢湾台風50年にちなみ、vol68より6回にわたり伊勢湾台風災害を特集してきましたが、今回の総集編でもってこのシリーズを終えることになりました。

伊勢湾台風災害の詳細は、vol68よりvol72を参照下さい。

なお、この資料は、創刊号からの全てが木曽川文庫ホームページよりダウンロードできます。

表紙写真

上
「筏川排水機場」
江戸時代から上流地域の排水先として筏川は重要な河川でした。現在も大規模な排水施設が稼動しています。

中
「木曽川水管橋」
木曽川用水の水を三重県に送る水管橋。橋脚を東名阪自動車道木曽川橋と共用しています。

下
「筏川」
筏川の上流部に親水公園が整備されています。風車は、デ・レイケの母国・オランダとの友好の記念で造られました。

『KISSO』Vol.73 平成22年1月発行

編集・発行 国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所調査課
〒511-0002 三重県桑名市大字福島465 TEL（0594）24-5715 ホームページ URL http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/